

# 「一人ひとりが主役のむらづくり」 ～お互いさまのむらづくりを目指して～

社文研アダルトチーム

柳田 紀代子<sup>1</sup>・寺本 伸子<sup>2</sup>・猿渡 寛良<sup>3</sup>・濱田 大造<sup>4</sup>

<sup>1</sup>熊本大学大学院 社会文化科学研究科博士前期課程 1年

<sup>2</sup>熊本大学大学院 社会文化科学研究科博士前期課程 2年

<sup>3</sup>熊本大学大学院 社会文化科学研究科博士前期課程 2年

<sup>4</sup>熊本大学大学院 社会文化科学研究科博士前期課程 2年

五木村民が住み慣れた村で最後まで自分らしく暮らしていくためには、自助・共助・公助のバランスのとれた社会が必要である。

一人ひとりが得意なことを生かすことで、まず本人が輝き、集落が元気になり、最終的には、村民同士が「お互いさまですから」と言い合える共に支え合う社会を創っていくことを目標に、テーマを「一人ひとりが主役のむらづくり」～お互いさまのむらづくりを目指して～とし、提案していきたい。

【自助】自分の責任で、自分自身が行うこと。

【共助】自分だけでは解決や行うことが困難なことについて、周囲や地域が協力して行うこと。

【公助】個人や周囲、地域あるいは民間の力では解決できないことについて、公共（公的機関）が行うこと。

## はじめに

私たちは、大学院のプロジェクト研究及び「山間地の集落機能維持システム構築のための政策研究」活動の一環として、今回、五木村をフィールドに調査を行った。5月から、「五木の民俗」「川辺川ダムと五木村」「五木村学術調査」をはじめとする多くの文献を読み解くことから始まったこの研究は、8月16日の予備調査、9月18～20日の2泊3日の合宿調査、五木村役場や関係機関、県川辺川ダム総合対策課への聞き取り調査をもって分析を行い、この政策提案に至った。

私たちのチームは全員が社会人であり、それぞれの専門分野の観点から「五木村民の生活やコミュニティ」に着目し、調査を進めていった。五木村は、全国あるいは県内の過疎地と同様、人口減少しているが、ダム基本計画が決まった時点から、急激なカーブを描くなどダム問題により過疎化に拍車がかかったのは間違いのない事実である。一方、ニュータウンと見まがうばかりの頭地代替地、生活関連施設の集積度、人口に比べ、立派な道路や道の駅や温泉センターなどの施設、それでも今なお止まらない人口減……。ダムに翻弄された年月の長さが「五木のコミュニティ」の問題を見えにくくしている状況が確かにあった。

今回、私たちは、ダム問題を一旦置いて、五木村の生活の課題やコミュニティについて調査を行った。今回の調査により導き出された課題は、五木村の地理的な位置や歴史とも深く関わるものであり、もちろん、ダム問題の影響も否定はできない（図-1参照）。

調査を通じ出会った五木の方々の笑顔、五木の子守唄に代表される連綿と続く歴史、そして日本一の水質を誇る清流川辺川、それらを大切に引き継いでいくために、五木のコミュニティの再生策を提案していきたい。

## 人口の推移

五木村及び県、類似地域等の人口推移について比較

### ① 人口の推移

(人)

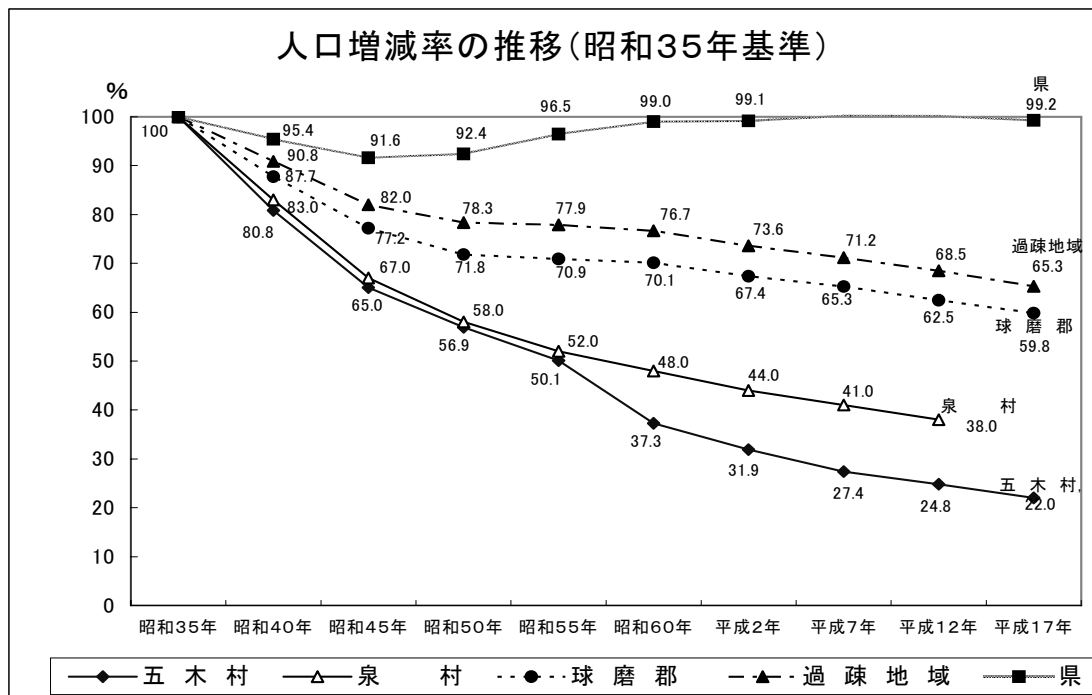
	昭和35年	昭和40年	昭和45年	昭和50年	昭和55年	昭和60年	平成2年	平成7年	平成12年	平成17年
五木村	6,161	4,981	4,006	3,507	3,086	2,297	1,964	1,687	1,530	1,358
泉村	7,281	6,021	4,904	4,200	3,803	3,466	3,187	2,952	2,775	
球磨郡	105,468	92,523	81,421	75,744	74,785	73,952	71,054	68,824	65,883	63,110
過疎地域	829,613	753,639	680,343	649,990	646,127	636,218	610,764	590,611	568,273	541,837
県	1,856,192	1,770,736	1,700,229	1,715,273	1,790,327	1,837,747	1,840,326	1,859,793	1,859,344	1,842,140

### ② 増減率（昭和35年を基準とする）

(%)

	昭和35年	昭和40年	昭和45年	昭和50年	昭和55年	昭和60年	平成2年	平成7年	平成12年	平成17年
五木村	100	80.8	65.0	56.9	50.1	37.3	31.9	27.4	24.8	22.0
泉村	100	83.0	67.0	58.0	52.0	48.0	44.0	41.0	38.0	
球磨郡	100	87.7	77.2	71.8	70.9	70.1	67.4	65.3	62.5	59.8
過疎地域	100	90.8	82.0	78.3	77.9	76.7	73.6	71.2	68.5	65.3
県	100	95.4	91.6	92.4	96.5	99.0	99.1	100.2	100.2	99.2

※泉村（現八代市）については、五木村の類似地域であることから、比較対象として掲載。なお、泉村は、平成17年8月に八代市と合併（現八代市）



(資料) 国勢調査資料

図一 五木村の人口の推移（出典：ふるさと五木村づくり計画）

## 1. 現状の分析と課題

### (1) 調査方法

平成21年9月18～20日、五木村の7集落（頭地9、宮園20、平沢津25、野の脇3、九折瀬11、下谷7、白岩戸30：集落名の後の番号は図-2の地図上の番号を表す、表-1参照）の区長及び住民の方々31世帯に対し直接面談し聞き取り調査を行った。本稿では、生活関連に絞って報告したい。

以下に、調査に入った各集落の五木村内の位置及び五木の集落ごとの人口を参考までに記載する。

調査にあたっては、調査結果ができるだけ偏りのないように、町の中心部である頭地、田んぼがありお堂祭りが比較的盛んな宮園、五木村内でも山間地にあり交通の不便な平沢津、またその逆に位置する野の脇、村営住宅があり比較的若い子育て世帯が多い九折瀬、下谷、八代地域から入ると五木の玄関口になり、人口も比較的多い小鶴地域の中に位置する白岩戸と選定を行った。

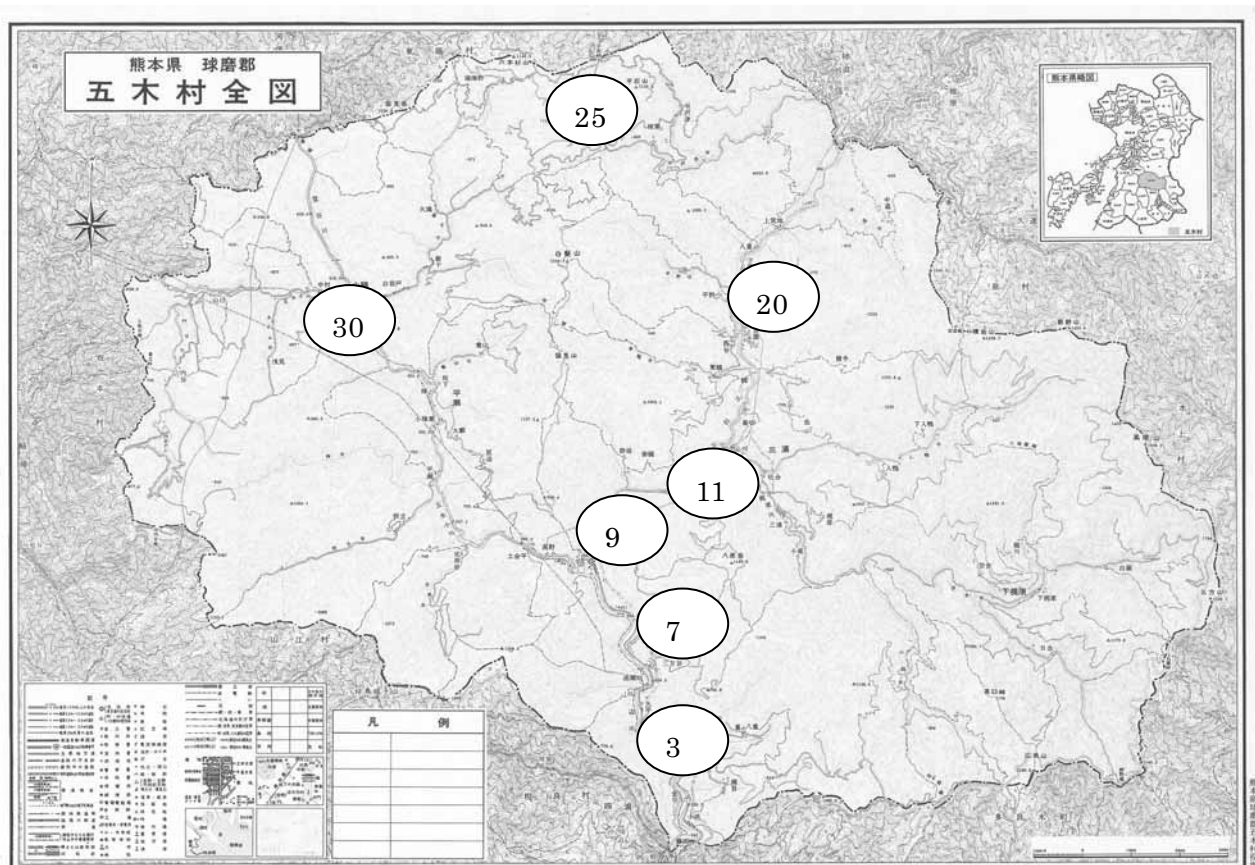


図-2 調査区域（出典：ふるさと五木村づくり計画より加工）

表－1 集落ごとの人口（出典：ふるさと五木村づくり計画）

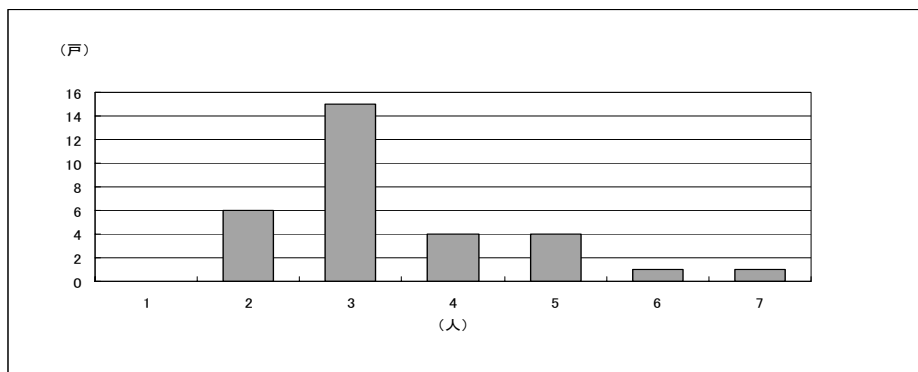
	集 落 名	世帯数 (戸)	人口 (人)
1	小 浜 (こはま)	2	3
2	瀬 目 (せめ)	9	24
3	野々脇 (ののわき)	7	15
4	宮目木 (ぐうめき)	2	4
5	葛の八重 (くずのはえ)	8	17
6	大 平 (おおひら)	3	3
7	下 谷 (しもたに)	29	75
8	三方谷 (さんぼうたに)	2	3
9	頭 地 (とうじ)	114	291
10	掛 橋 (かけはし)	2	3
11	九折瀬 (つづらせ)	14	53
12	竹の川 (たけのかわ)	19	51
13	入 鴨 (いりかも)	6	17
14	梶 原 (かじわら)	17	47
15	小 原 (こばる)	5	7
16	日 当 (ひあて)	12	23
17	白 蔵 (しらぞう)	11	20
18	裾 川 (すそごう)	4	7
19	白 水 (しらみず)	18	43
20	宮 園 (みやぞの)	47	112
21	松尾野 (まつおの)	7	37
22	八 重 (はえ)	13	26
23	平 野 (ひらの)	41	92
24	栗 鶴 (くりづる)	14	42
25	平 沢 津 (ひらさわつ)	18	46
26	端 海 野 (たんかいの)	4	12
27	高 野 (たかの)	19	59
28	下平瀬 (しもひらせ)	25	45
29	上平瀬 (かみひらせ)	15	24
30	白岩戸 (しらいわど)	16	53
31	中 村 (なかむら)	7	11
32	山 □ (やまぐち)	12	31
33	内 谷 (日当) (うちだにひあて)	6	13
34	出ル羽 (いずるは)	8	18
35	内 谷 (日添) (うちだにひぞえ)	9	26
36	小 鶴 (こづる)	13	34
	合 計	558	1,387

(資料) 五木村住民基本台帳 (H21. 5. 31)

(2) 調査結果

a) 回答世帯の属性

調査を行った31世帯では家族3名で暮らしている世帯が一番多かった。又、家族の構成員の年齢は70歳代を中心として50～80歳代が多かった (図－3、4参照)。



図－3 家族の人数

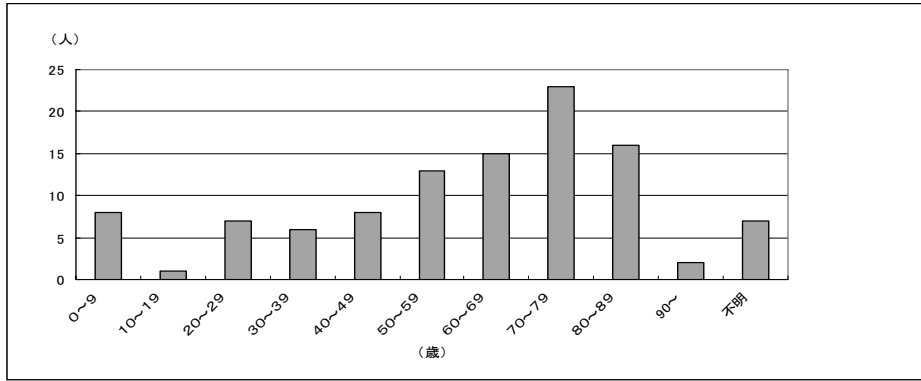


図-4 家族の年齢構成

b) 集落外の家族からの生活支援

31世帯の中で、集落外に住んでいる家族から月1回以上生活支援を受けている世帯は、12戸(38%)と多く、集落外に住んでいる68名の親戚の中で、五木村の他集落、相良村、人吉市、熊本市、城南町、八代市に住んでいる18名(26%)が住民の生活を支えている(図-5、表-2参照)。

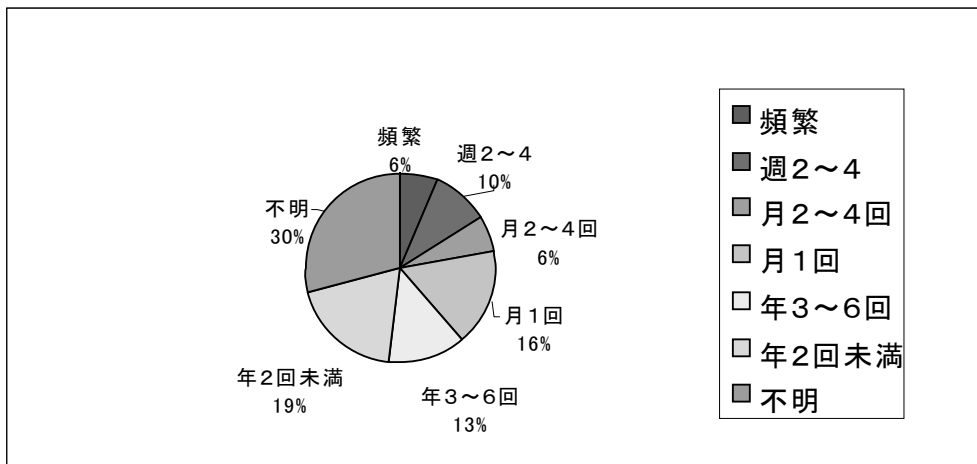


図-5 集落外の家族から生活を支援される世帯

表-2 町外から生活を支援する家族

帰省の回数	人数(人)	割合(%)	居住地
頻繁	3	26	相良村、五木村、
週2~4	2		人吉市
月2~4回	5		五木村、人吉市、熊本市
月1回	8		人吉市、熊本市、城南町、八代市
年3~6回	5	47	人吉市、熊本市、佐賀県、福岡県
年2回未満	28		---
不明	17	25	---
合計	68	100	

c) 集落での交流

お堂祭りは各集落で行われていたが開催が1回と少ない集落もあり、村が補助する祭り以外は簡素に行われているようだ(表-3参照)。

現在も、6集落で月1回の常会が開催されているが、高齢化が進んだ1集落では、無線がつながっており情報伝達が可能であると、常会は年2~3回の開催になっている。(表-4参照)

高齢化や住民の減少により、老人会、消防団は他集落と連携し活動を行っている(表-5、6、7参照)。他集落との共同作業が無いか尋ねると、野の脇集落で山仕事、白岩戸集落で運動会、盆踊りが行われるとのことであった(表-8参照)。又、婦人会、PTAの集落を越えた活動については、聞くことができなかつたが学校の統合もあるので集落を越えた活動の母体として期待がもてそうである。

表-3 各集落ごとのお堂祭り

行政区	行事名	時期	内容等
頭地	①春祈禱、直会(なおらい) ②綱引き③アッカグラ(新嘗祭)草払い、直会(なおらい)	①春 ②10/15 ③11月	②(今はお堂での行事という訳ではないが、)頭地地区全体で伝承館の前で大人が綱引きの縄を藁で編み、編んだ頃月が昇るのでお神酒やスキの穂を上げて月に拍手を打ち、地区住民で道路で綱引きをする。(藁は村内の宮園等の農家から調達する。)終わったら藁を丸くして子どもが相撲をする。綱にさわると病気をしない。また、縄を樹木に結びつけると果樹が実る。 ③新嘗祭。お参りと伝承館で直会をする。法面の草払いをし、11時から神社で祝詞をあげる。
宮園	①春祈禱 ②だごひゃごまつり ③阿蘇神社のお祭り ④大銀杏祭り ⑤掃除	①3月15か16日 ②8月15日 ③10月16日 ④11月 ⑤毎月1回 第1日曜朝 7:00~	①神社で神官さんと祈禱。 ②子供から老人まで北小学校で盆踊り、ヤマメのつかみ取り、カラオケなど、区長、役場、北公民館分館長(山下てるひろ議員さん)が中心となっていく。 ③阿蘇神社の祭り神官さんが来る子供から老人まで300人集まる。焼き肉、ビールなど。 ④リバーサイド祭り、大銀杏祭り、昔は宮園の祭りだった。今は小学校北校区の人が集まってやっている(平野、はやを含む)役場、藤本議員中心に行く。 ⑤公民館、お堂、神社の掃除、1戸から1人ずつ出る。
平沢津	①天満宮祭り ②山の神祭り ③峠の上の阿蘇神社でシャクナゲ花見(祭りと言えぬかは分からない) ④マダラのつかみ取り ⑤年に何回かの祭りの後、道うち、花替えなど掃除	①11月 ②1月、5月、9月(本祭) ③4月 ④お盆	②個人で山に参る(9月の本祭については全戸集まる)。 ③シャクナゲの花見、雨天時は体育館でやることもある。 ④平沢津の上方に位置する集落の数名が村から補助金を得て主催。
野々脇	①薬師さん・飲み方 ②祇園の夜、祇園祭 ③秋の祇園祭(八坂神社)	①6月7、8日 ②6月14、15日 ③10月15日	掃除…昔は毎日のようにしていた。花を供える。 今はあまり参らないが、昔は毎日みんな集まっていた。
九折瀬	①堂まつり ②ハルキトウ ③アッカグラ	①2、3月 ②3月23日 ③11月	①1年中の豊作祈願をする。弓矢を作った的を狙って弓を引く。昨年か神官が具合が悪い。 ②1年中の豊作を感謝する。
下谷	1)秋神楽(阿蘇神社参り) 2)春祈禱(阿蘇神社参り) 3)太鼓踊り(五木子守唄祭り)	1)11月15日 2)2月11日	①地区の総代が阿蘇神社に焼酎奉納に行った後、地区でお参りをする。 ②春祈禱に関して…阿蘇神社への豊作祈願。その場にいる場合は焼酎を回して飲む。遠くにいる人は遠くからお祈りする。 ③太鼓踊りは、S41~2位まで秋神楽の際に豊年感謝の意味で踊られていた。一家から家長(長男)のみが参加していたが、現在は人が少ないので、それ以外の人も参加している。(H18~20に村の子守唄祭りに参加した。)踊り方には細かいルールがあるが、教わる人によって微妙な違いがある。「がんごがんご…」と言いながら踊る言葉がある。門外不出の踊り。
白岩戸	①春祈禱		

表－4 各集落ごとの自治会組織と活動（常会）

行政区	自治会の有無	開催時期等	開催場所	行事・活動内容
頭地	あり (常会)	毎月1日の晩 (年12回)	伝承館	毎月の常会には77～8人参加。参加できない人には、班長が資料を会員に配る。入っていないのは学校の先生や営林署など転勤のある人で、地元の人は全員入っている。行政からの伝達や行事の話し合いをする。
宮園	常会	第1日曜朝7:00 ～毎月	①公民館	①掃除など。
平沢津	有(常会)	月1回だったが4年 くらい前から年2～ 3回、年末、6月健 康診断の通知、要望 を伝えるときなど	学校の 体育館	集落の人への連絡、役場への意向形成など。無線もつながっており、4年前からは年に2～3回、健康診断通知や要望を役場に伝えるとき以外は集会という形はとっていない。高齢化に配慮して区長自らパンフレットを綴って各戸へ配っている。
野々脇	○	月1回	お堂	祭りの話し合いや村からの連絡など。
九折瀬	有	年12回 (毎月月末、日は決 まっていない)	集会所	月1回の常会。高田さんは区長を20年務めた。区長は選んで回す。以前は16～18世帯あったがダム問題で移転し、14世帯になった。行政からの連絡事項の伝達。
下谷	有	年12回(毎月1日)	集会所	・行政からの連絡事項の伝達。
白岩戸	○	12	集会所	行政からの伝達、祭り。

表－5 各集落ごとの婦人会組織と活動

行政区	婦人会_有無	開催時期	開催場所	行事・活動内容
頭地	無			
宮園	有	月1回		①運動会お茶の接待や競技参加、踊り等 ②子守歌祭りでおにぎりうどんを出す ③ミニバレー ⑤グランドゴルフ ⑥ゴキブリ団子作り ⑦水害時の炊き出し ⑧農芸学院へはいや踊り等慰問 ⑨福祉協議会の勉強会参加 ⑩学校行事の学習発表会で婦人も発表、はいや踊り
平沢津	無			
野々脇	△	不定期	不定	瀬目マロン会などの物産の共同作業(現在休止)
九折瀬				
下谷	有		村内には校 区ごとに3 つの婦人会 がある	
白岩戸	無			10年前になくなった

表－6 各集落ごとの老人会組織と活動

行政区	老人会_有無	開催時期	開催場所	行事・活動内容
頭地	有			鶴亀老人会、自分が入っていないので不明
宮園	有	会合は月1回	北小学校	①運動会参加踊り等 ②学校体育館周りの除草 ③週間に1回グランドゴルフ ④1週間に2回ゲートボール ⑤シルバーヘルパー ⑥生き生き大学で勉強 ⑦研修日帰りツアー
平沢津	有（宮園と共同で）		宮園	元老人会会長の中村さんが宮園へ行ってグラウンドゴルフをする
野々脇	無			
九折瀬				
下谷	有		小学校区単位で形成	
白岩戸	有	1	分館	白滝老人クラブ、週1回グラウンドゴルフ

表－7 各集落ごとの消防団組織と活動

行政区	消防団_有無	開催時期	開催場所	行事・活動内容
頭地	有			集落の消防団というよりも村の消防団が主。広域消防組合北分署もあり、救急車も配備されている
宮園	有	5回以上	ポンプ倉庫	4分団 3月15日総会？12月28、29、30日夜警、1月7日出初め式、大雨の時も出動
平沢津	無			20年前に宮園の消防団の合併。何かあれば電話して五木中の分団（九分団）が来るらしいが、役場がその都度召集するのでどこが来るかは分からない。宮園の分団は四分団
野々脇	無			
九折瀬	有			頭地地区の一分団
下谷	有			小学校区で1つずつ。五木全体で東、西、北に。下谷は1分団
白岩戸	有			3分団で活動、人捜し（認知症の方の徘徊など）



表－8 他集落との共同作業

行政区	他集落との共同作業有無	開催期間	開催場所	行事・活動内容
頭地				
宮園				
平沢津	無			
野々脇	有	数回	不定期、山	話し合いや、野々脇・瀬目・葛八重（くずのはえ）・大平・宮目木（ぐうめき）・小浜集落の人が集まる
九折瀬				
下谷	有			子供の時は田植え、稲刈りなどに近くの集落にいる親せきを手伝う程度行っていた。正式のものではない
白岩戸	有			運動会、ゲートボール、グラウンドゴルフ、盆踊り

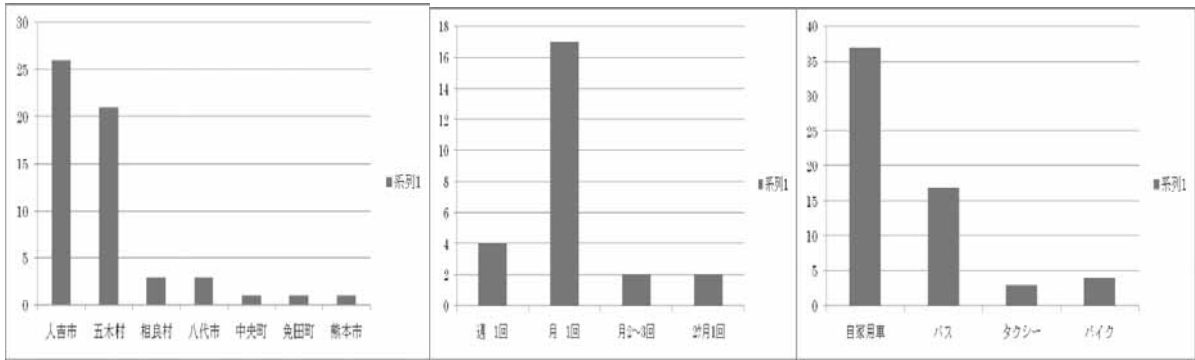
## d) 生活と交通

買い物などの生活関連施設や保健・医療・福祉の公的サービス、娯楽等については五木村内のみでは不足しているが、月に1回程度以上は、人吉、八代圏域を訪れ、概ね住民の方々も満足度が高い。車を所有していないあるいは高齢で運転ができない方向けの交通機関については、今年から巡回バスやスクールバスの混乗が始まっており、評価が高い。

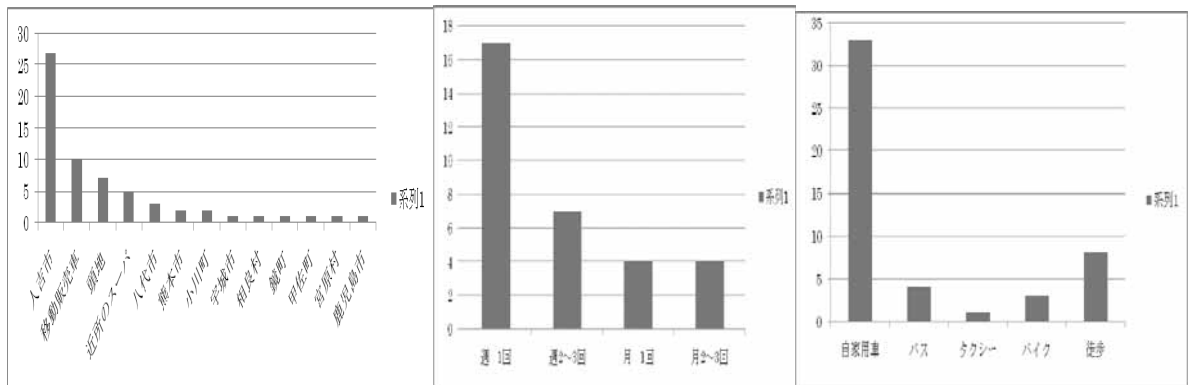
- ・ 買い物は、週1回程度人吉市で行われているケースが多い。移動販売車の利用もされている（図－6、7参照）。
- ・ 巡回バスが今年から運行されている、1日1往復の運行である。スクールバス混乗は、4コース、巡回バスはスクールバスが通らない地区中心に3コースの実績がある。利用状況は1月から7月までの利用状況を見ると、1月は、迎え19名送り16名が、7月は迎え69名送り53名と利用者が増加し、総利用者数は7ヶ月で629名と村民に徐々に定着してきているのが伺える（表－9参照）。潜在的な利用者の掘り起こしが必要である。
- ・ 交通手段としては、自家用車がほとんどである。しかし、運転者が高齢化するに従って、家族の運転やバス、タクシーの利用と変わっている。現在は、80歳過ぎの高齢者でも、自家用車の運転を行っているが、数年後は、運転ができなくなる可能性が高い。そのため、今後は、近所で乗り合わせできるような共助の精神が求められている。将来的には、乗り合いタクシーの導入も検討課題にあがってくるのではないかとと思われる。

表－9 スクールバスの利用状況（平成21年1月～7月分）五木村役場提供

スクールバス混乗及び地区外運行利用状況表																		
	行き先	1月分		2月分		3月分		4月分		5月分		6月分		7月分		小計	備考	
		迎え	送り	迎え	送り	迎え	送り	迎え	送り	迎え	送り	迎え	送り	迎え	送り			
混乗	富園方面					8		12		14		22	22	14	12	104		
	小鶴方面							10		24		31	31	17	11	124		
	端海野方面	1	1	1		4										7	4月から運行なし	
	三浦方面				4		3		8		6	1	11	11	8	1	53	
	下梶原方面							14	9	11		11	8	4	2	59	4月から運行	
小計		1	1	5		15		44	9	55	1	75	72	43	26	347		
地区外	瀬目方面	3	3	5	5	5	5	2		1	1	1	1	2	2	36		
	下梶原方面	6	3	7	9	9	10			11	14	13	18	14	15	129		
	平沢津方面	9	9	9	10	6	6	14		6	6	11	11	10	10	117		
小計		18	15	21	24	20	21	16	0	18	21	25	30	26	27	282		
合計		19	16	26	24	35	21	60	9	73	22	100	102	69	53	629		



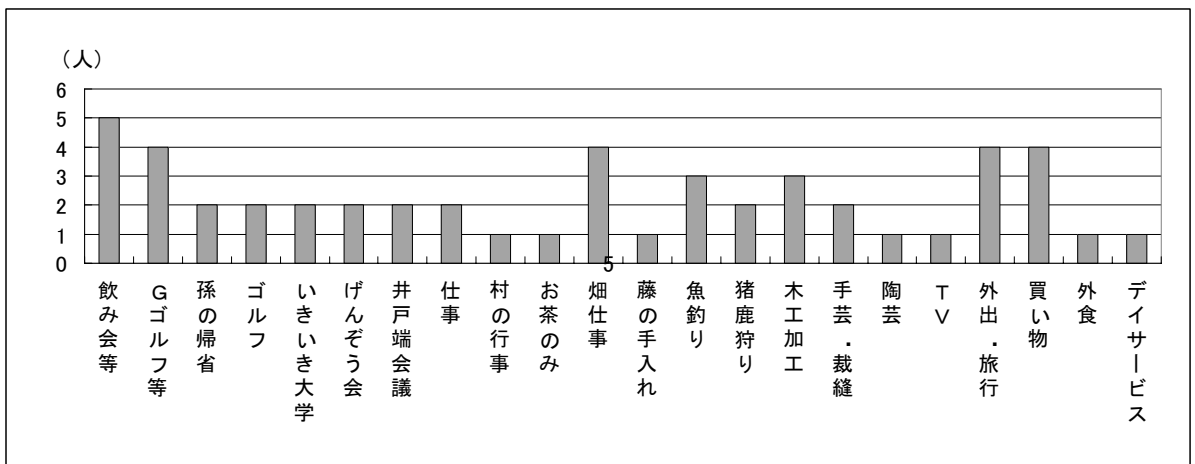
図一六 医療機関・福祉機関への行き先、頻度、交通手段



図一七 買い物の行き先、頻度、交通手段

e) 現在の楽しみ

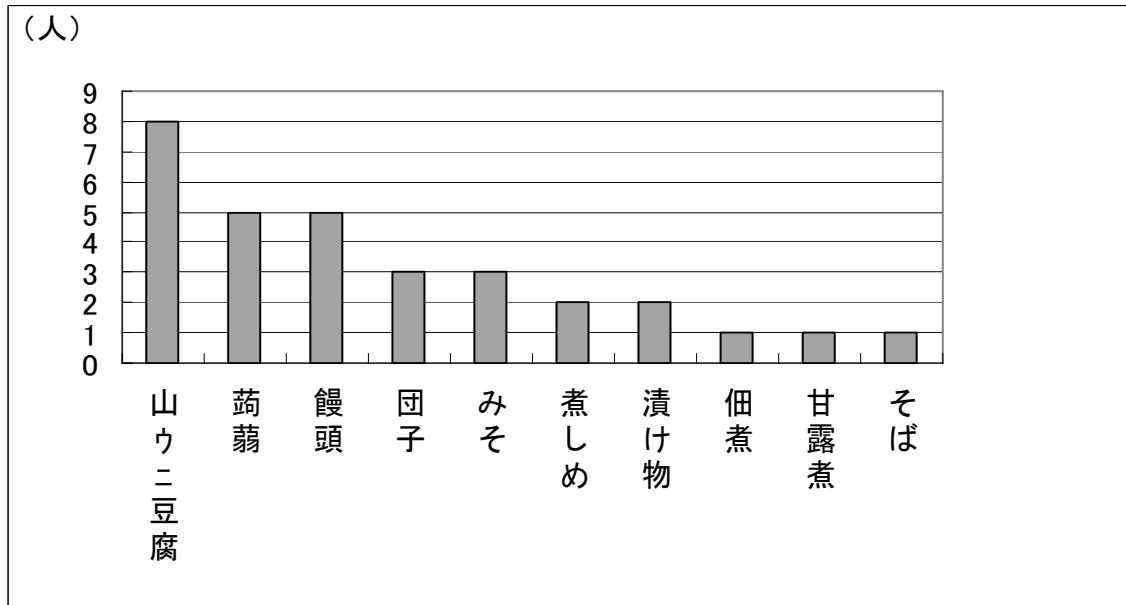
現在の楽しみを聞くと、複数の答えが返ってきた。内容は、飲み方、グラウンドゴルフなどの他者との交流や畑仕事、魚釣り、木工手芸などの趣味、旅行、買い物などの外出などである（図一八参照）。グラウンドゴルフやゲートボールを楽しみにしているおり、他に、畑作業や自分で漬け物を漬けたり、木工品を作ったり、帽子や洋服をつくったりと自慢のものを持っている。



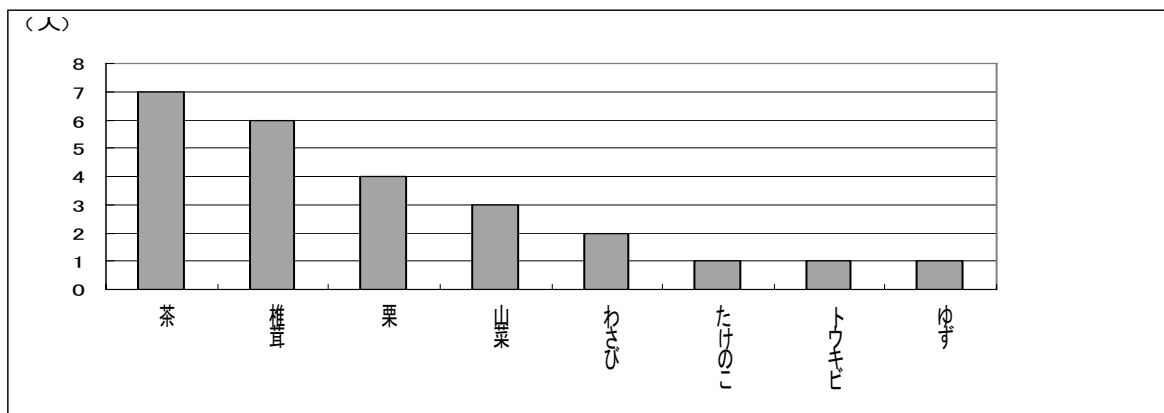
図一八 現在の楽しみ

f) 集落・村への誇り

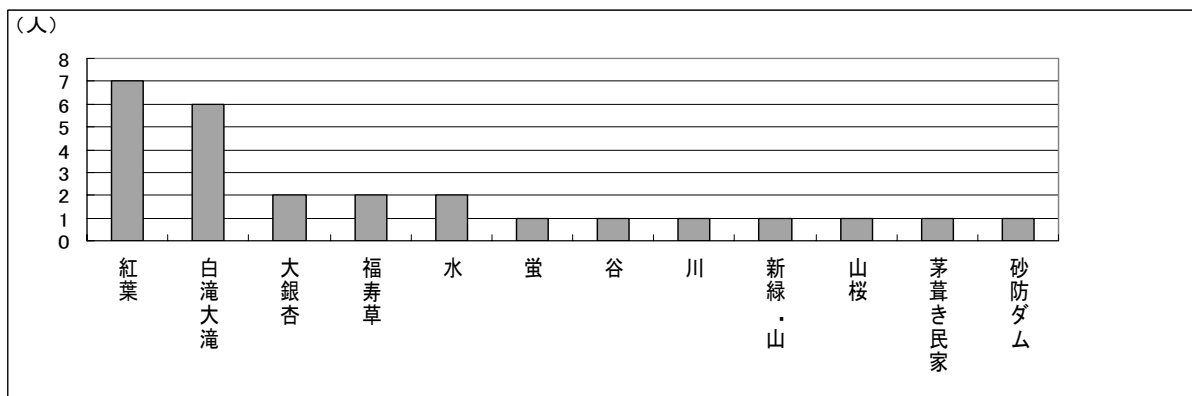
地元のおすすめ品を尋ねると、加工品は山ウニ豆腐、蒟蒻、饅頭など、農産物は茶、椎茸、栗など、おすすめ景勝地は紅葉、滝、大銀杏、福寿草などの回答が得られ、自分の住んでる地域への自負心が感じられた（図－9、10、11参照）



図－9 地元のおすすめ加工品



図－10 地元のおすすめ農産物



図－11 地元のおすすめ景勝地

### g) 居住の意思

「現在住んでいる所から移り住みたいか？」との質問に対し、89%の方から「五木村で暮らしたい」との回答を得た。(図-12参照) 集落への愛着や集落の人たちとのつき合い、交流を大切にしていることが伺える。

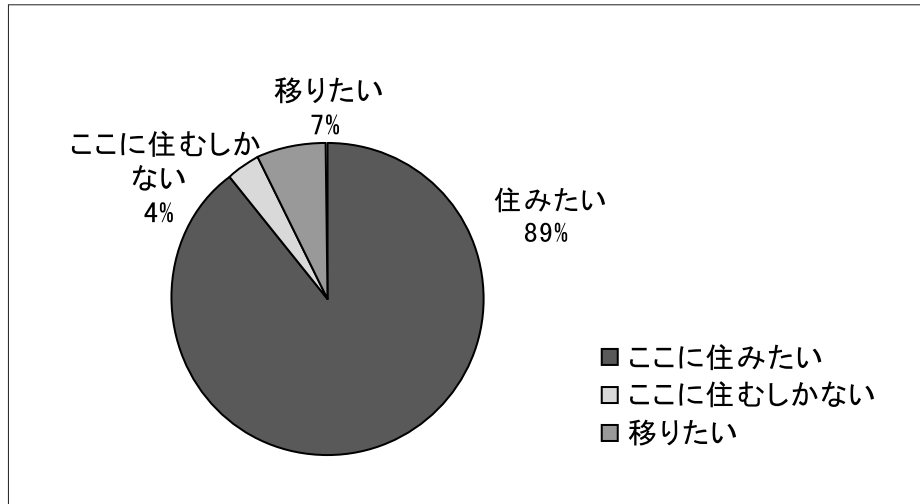


図-12 居住の意思

### (3) 自助・公助・共助について

#### (a) 「自助」について

「自助」の点で言えば、狭いながらも自分の畑で自給自足の生活を行い、病院やスーパーも自分の車や子どもたちの車で行き、スクールバスの混乗にも感謝の気持ちの忘れない村民の方々に接すると十分に自律し、矜持を保たれている。

例えば「巡回バスの本数が増えた方がいいですか」との問いに「これ以上望むとバチがあたる」といった答えや「自宅が大きな道路から離れているので、郵便ポストを大きな道路沿いに設置し毎日取りに行く」方や、「バス停まで徒歩40分くらいかかるが近所の人に乘せてもらうのは気の毒なので、歩いて行くのは当然です」などの発言があった。

#### (b) 公助について

「公助」の点で言えば、頭地に集積した生活関連施設（役場、診療所、保健福祉総合センター、駐在所、商工会、JA、物産館、温泉センター、交流センター、保育所、小中高校など）や道路、五木村と県で今年「ふるさと五木村づくり計画」を策定されたが、新たな試みも始まっている。スクールバスの混乗（診療所やお出かけに無料で利用できる）、野菜の個別集荷（集落で言えば週1回回ってくる）、村内8箇所の拠点施設で送迎つきのげんぞう会（健康体操教室）を実施するなど充実した公的サービスである。

#### (c) 共助について

「共助」の点で言えば、集落内の繋がりは強いことが感じられるが、自律心が強く迷惑をかけたくないとの遠慮が感じられる。木場作や山仕事が多く、水田地帯のような共同作業が少なかったというのも一因かもしれない。今は自分たちで何とか生活できているが、数年後、更に高齢化が進んでいくと、巡回バスにも乗れないことも予想される。

道の駅の物産館については、五木産の物は1割程度しかなく、今年度から巡回して青果

を集荷することを始めているが、参加する方は7件に留まっている。これは、一定量求められることの負担感や換金への抵抗があるようである。

各集落では、月に1回程度の常会は実施されているが、お堂祭りや太鼓踊りなどの伝統行事は年々担い手が減ってきており、集落の歴史や伝統が失われる怖れがある。

村全体で見ると、住民の方々の生活も頭地頼りというよりも子どもや親戚が多く住む人吉市、八代市、熊本市に向けられていることが感じられた。

「ふるさと五木村づくり計画」の中で、村民総認知症サポーター養成やシルバー人材センター支援事業などのひとつづくり事業が始まったところであり、村民総参加のきざしが見え始めている。

## 2. 政策提案

生活の「共助」に着目し、個人レベル、集落レベル、村レベルでの「共助」を強くする取り組みを提案したい。村民一人ひとりが、昔から持っている技や知恵、負担にならない自分ができることを宣言し、むらづくりに参加していただくことで、村民の仲間意識の醸成、集落単位での助け合いの気持ちの醸成、村全体で顔見知りになり、最終的には、村民の方が、「な～ん。お互いさまだけん遠慮せんで言いなっせ」と言い合える社会、自然とお互いが支え合える社会を目指す。

ここでは、個人レベルでできること、集落レベル、村全体レベルでできることをそれぞれで提案したい。

それぞれのレベルでの取り組みをプロジェクトとして提示し、その具体的事業の内容、期待できるや効果、取り組む上での問題点などについて記載していく。

### (1) 提案プロジェクトⅠ

「ちょこっとやってみようキャンペーン」

～道の駅の物産館に、自分の自慢のものを出品する～

#### a) 具体的内容

物産や自分の作品を道の駅の物産館に出すことへの抵抗のひとつに、「わたしが作ったものなんて…」という謙虚な気持ちや量的にたくさん出さなければという負担感があることが挙げられる。そこで、まずは、一品出品することを体験していただく。更に、出品しやすいように、次のような取り組みも併せて行う。

#### ◎特設「五木のちょこっとコーナー」

物産館の一面に仕切りをしたコーナーを設置し、農家でない、またプロではない方の製品、作品と明示し、多少不揃いでも販売を行う。

#### ◎「五木のちょこっと」統一ブランド戦略

プロではないことの統一マークを張り、制作者の写真やちょこっと説明をつける。例えば「鶴喜さんのだんだん畑で取れたタマネギ」、「アサエさんのおばあちゃん直伝の手作りおはぎ」「次郎さんは子どもの頃からの手先が器用でした：手作りの花瓶」など、ちょこっと説明をつけることで、観光客に付加価値を感じていただき売り上げを伸ばす。

#### ◎「一品だけでも喜んで伺います」運動&「ジュニア集荷ヘルパー」

今年から、五木村では、村内を3コースに分けて集荷を行っている。そこで、キャンペーン期間中、集荷の方には、「一品だけでも喜んで伺います」運動を徹底していただく。

また、村内の子ども達全員に、「ジュニア集荷ヘルパー」を任命し、近所のお年寄りの分を集めてもらう。お年寄りは、子どもが来たら、「一品は出そう」と励みになるし、子ども達は役割意識、愛村心を養うことができる。子ども達は、朝から集荷し、そのままスクールバスで学校に行く。学校では、たくさん集荷した子どもはポイントがたまり、終業式で表彰する。

b) 期待できる効果

◎ちょっとした収入もあがり、お年寄りの生きがい、健康づくりにつながり、誇りを持ってもらえる。

◎物産館の売り上げアップ、五木ファンの増加に繋がる。

◎子ども達の愛村心を養うことができるという、一石三鳥の取り組みとなる。

c) 事業遂行上の問題点

予算的には、統一ブランドマーク作成費用、既存の集荷作業に追加する費用等である。この取り組みは、物産振興、高齢者の健康、生きがいづくり、教育委員会と横断的な取り組みになるので、関係機関の連携が不可欠である。

## (2) 提案プロジェクトⅡ

「自分の集落をもっと知ろうキャンペーン」

～それぞれの集落の歴史、資源を見直し皆で共有しよう～

a) 具体的内容

五木村は、集落が点在し、その集落ごとの秘められた歴史、お堂や祭り、料理などの資源が豊富にある。その歴史や資源を知ること、集落への愛着、誇りを持ち、集落の人たちと話し合う中で、親密度もぐっと増す。

◎「集落の歴史をまとめてみよう」

歴史、お堂や祭りについて、集落のお年寄りから、話をきいてまとめる。集落の子ども達だけでなく、村外に住む子どもや孫、「五木ファンクラブ」にも呼びかけ、とりまとめを手伝っていただく。毎月の常会も活用する。

五木村全体としては、「五木の民俗」「川辺川ダムと五木村」「五木村学術調査」が発刊されているが、今回は、各集落ごとにまとめていく試みである

◎「集落のマーク、看板」を立てよう

それぞれの集落のことがよくわかったところで、集落にあったマークを作成し、看板を立てていく。自分の集落に愛着を感じていただくのと同時に、村外の人にも気になる集落巡りを楽しんでもらえる。

◎「集落の語り部」になろう

得意分野や詳しい分野を集落のお堂や川のたもとや公園、集会所などで、語っていただく。集落の歴史はもちろん、「鮎つりの語り部」「おまじないの語り部」「薬草の語り部」「郷土料理の語り部」といろいろなバージョンでのお願いができそうである。

内容によっては、小学校の社会科見学に対応し、例えば、環境関係をテーマとし、水

俣の「水俣の語り部」と連携したり、川との共生をテーマに八代市東陽町の石匠館とからめた商品化も可能になると思われる。

◎「集落応援団」を結成しよう

それぞれの村民には村外に暮らす家族がいる。人吉市や八代市に住む家族も多いが、頻繁に五木村に帰って来ている。村外に住む家族も小さい頃は五木村に住んでおり、ある程度顔見知りである。

まずは、常会に年に1回は村外の家族も参加することから始める。また、「集落応援団」を結成し、たまには、村外家族も一緒に地域の行事に参加したり、帰省する際には自分の家だけでなく、近所にごきげん伺いすることで、集落での互いに助け合いの気持ちを育てていく。緊急時の連絡先を互いに交換し、集落皆で支え合う雰囲気づくりを行う。

b) 期待できる効果

◎集落の方々の集落への愛着が湧き、歴史を思い出すことで、お年寄りの生きがい、健康づくりにつながり、誇りを持ってもらえる。

◎観光客の増加、五木ファンの増加に繋がる。

◎子ども達の愛村心を養うことができる。

◎集落外との繋がりも実感でき、離れたところから心配する家族の団結も強まる。

という、一石四鳥の取り組みとなる。

予算的には、看板設置費、集落歴史編纂作業費等である。

この取り組みは、集落の人に話を聞き、まとめる作業のため、ある程度のノウハウが必要となる。一番の問題は、高齢化が進む各集落で、編纂作業をするパワーがあるかということである。「五木ファンクラブ」や県内各大学やNPO法人など、村外のパワーを借りることも考えられる。

### (3) 提案プロジェクトⅢ

「五木村をもっと好きになるキャンペーン」

～自分の集落だけでなく、他の集落とも知り合いになろう～

a) 具体的内容

集落が点在しているが、様々な機能が集約された頭地よりも、思いの外、人吉市や八代市を生活圏にしている人が多い。集落間の交流はあまり行われていないようすである。

そこで、集落内で完結しない事柄については、集落間の交流や五木村全体での交流を行い、村民としての一体感、愛村心を醸成する。

◎「五木村まるごと図鑑」をつくろう。

IやIIの取り組みで、村民の方の得意なことや集落ごとの歴史や資源も明らかになる。そこで、各集落や村民ひとりひとりを紹介した図鑑を作成する（アルバムのようなもの）。

これまで、顔は知っていたけど、得意なことや困っていることは知らなかった人同士が話をするきっかけや他の集落に遊びに行きたくなる。

また、「鮎釣りを体験したい」「おまじないを受けたい」「炭焼きを体験したい」などなどの観光客向けにもこの図鑑からコーディネートが可能になる。

◎年に一度は大集会をしよう！

年に一度、五木小中学校の体育館に全村民が一堂に会し、集会を行う。集落ごとの出し物をしたり、それぞれ自慢の郷土料理を持ち寄り一緒に食事をして、全村民顔見知りの関係を築く。

b) 期待できる効果

◎子どもからお年寄りまで五木村に愛着が湧き、住民同士の繋がりを持ってもらえる。

◎五木村外へのアピール効果は大きく、観光客の増加、五木ファンの増加、物産の売り上げと地域経済の活性化に繋がる。

◎この取り組みは、個人、集落レベルの取り組みの集大成となる。

という、一石三鳥の取り組みとなる。

c) 事業遂行上の問題点

予算的には、図鑑作成費、集会費用等である。一番の問題は、村民のパワーをどう結集するとかということである。「五木ファンクラブ」や県内各大学やNPO法人など、村外のパワーを借りることも考えられる。

#### (4) 総合的な効果

今回の調査は、7地区のみの調査であり回答者も日中在宅している高齢者に偏っている。そのため、あくまで現段階での推測にはなるが、調査結果から、五木村は、共助に較べ、自助・公助は充実しており、アンバランスな状況である。今回の提案により、自助・共助・公助の3つのバランスのとれた社会の実現を目指す。

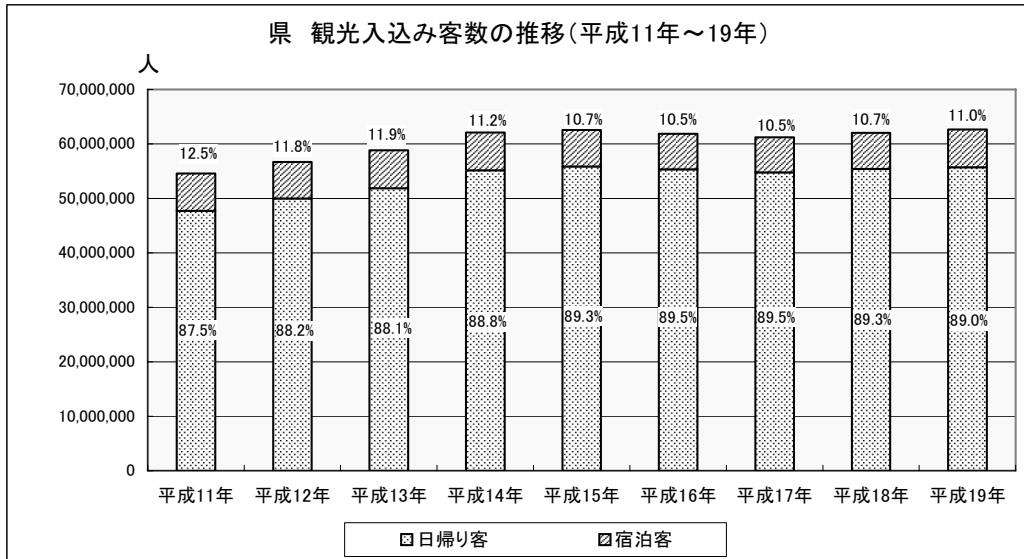
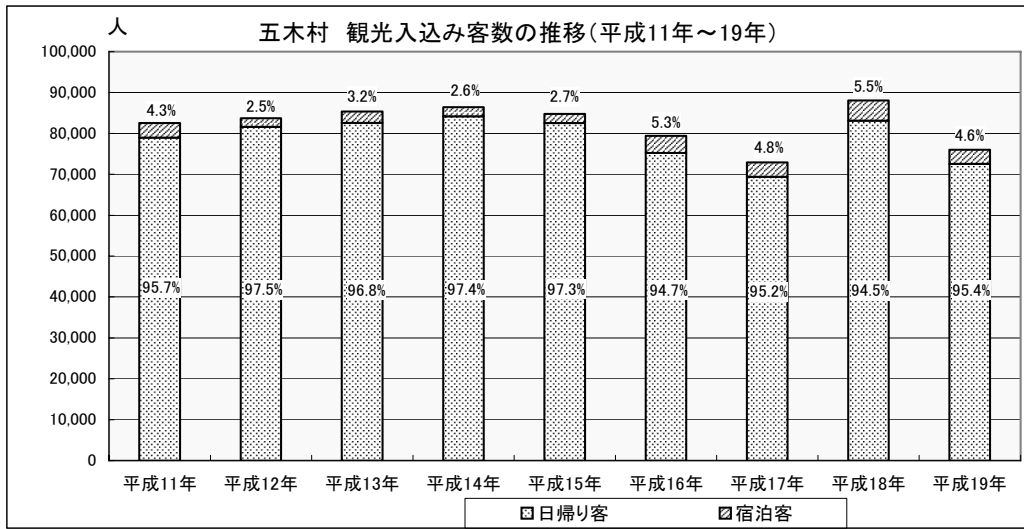
提案を考える際、五木の住民の立場にたって考えてみた。村民一人ひとりが、昔から持っている技や知恵、負担にならない程度の自分ができることを宣言し、むらづくりに参加していただくことで、村民の仲間意識の醸成、集落単位での助け合いの気持ちの醸成、村全体で顔見知りになり、最終的には、村民の方が、「な～ん。お互いさまだけん遠慮せんで言いなっせ」「そがんたい、おたがいさまだけんね」と言い合える社会、自然とお互いが支え合える社会を目指す。

提案プロジェクトⅠ「ちょこっとやってみようキャンペーン」で住民一人ひとりが自分のできることを少しずつ持ち寄ることで、個人個人が元気になり、提案プロジェクトⅡ「自分の集落をもっと知ろうキャンペーン」で、集落全体が元気になっていく。その集大成として、提案プロジェクトⅢ「五木村をもっと好きになるキャンペーン」で村全体が元気になっていく。さらに、7～8万人に留まっている観光客（図-13参照）を増加させ、物産館の売り上げアップやコミュニティビジネスの発展につなげることができる。そのことで、一人ひとりが主役のむらづくりが実現でき、五木村民が住み慣れた村で最後まで自分らしく暮らしていく社会を創っていくものである。



五木村及び県の観光入込み客数（日帰り客、宿泊客の割合）について比較 (人)

		平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年	平成18年	平成19年
五木村	日帰り客	79,003	81,598	82,614	84,181	82,512	75,209	69,376	83,173	72,563
	宿泊客	3,518	2,077	2,748	2,245	2,273	4,248	3,533	4,844	3,482
	合計	82,521	83,675	85,362	86,426	84,785	79,457	72,909	88,017	76,045
県	日帰り客	47,731,500	50,014,300	51,859,700	55,146,400	55,860,700	55,357,700	54,772,200	55,411,900	55,738,100
	宿泊客	6,821,800	6,675,200	7,000,100	6,946,800	6,689,800	6,489,000	6,424,600	6,651,500	6,909,300
	合計	54,553,300	56,689,500	58,859,800	62,093,200	62,550,500	61,846,700	61,196,800	62,063,400	62,647,400



(資料)五木村：五木村資料 県：平成19年熊本県観光統計表

図-13 観光客数の推移 (出典：ふるさと五木村づくり計画)

## おわりに

五木村村民と接すると、村民は自立心・独立心が旺盛で、行政に対しては、そんなに多くを望んでないことが分かる。村民は、村にできた診療所をありがたく思い、巡回バスやスクールバスをありがたく思い、自然の恵みに感謝し、村民同士の絆を大切にし、隣近所で助け合い、昔ながらの自然を慈しみ、自然と共生して生きていることが分かる。

そして、都会の生活に慣れた私達は、そこに慎ましい日本人の姿を感じるのである。だから、村民と接すると、ほぼすべての事柄に、何かしらの感動を覚える。

そんな慎ましい村民が住む五木村は、ダムに翻弄され続けてきた。このことは現在進行中のことでもある。だから、なんとしても、五木村が五木村であり続けることが可能な政策の立案が急がれるのである。今回の私達の提案が、五木村振興の一助になれば幸いである。

謝辞：本政策コンペ遂行にあたり、ご指導いただいた熊本大学山中進名誉教授、熊本大学政策創造研究教育センター上野眞也教授、東海大学総合教育センター・熊本教養教育センター鈴木康夫教授、並びに熊本大学政策創造研究教育センター河村洋子、円山琢也両准教授、また特に五木村合宿調査にあたり、準備から取りまとめまでご協力をいただいた五木村役場ふるさと振興課田中良幸課長及び小木曾早苗集落活性化支援員に対し、厚く御礼申し上げます。

## 参考文献

- 1) 五木村民俗調査団／編：五木の民俗、五木村役場、1993.
- 2) 五木村川辺川ダム編纂委員会／[著]：川辺川ダムと五木村、五木村役場、2009.
- 3) 五木村総合学術調査団：五木村学術調査 人文編、五木村役場、1987.
- 4) 湯川洋司：川辺川ダム建設計画に伴う熊本県五木村の村落再編過程に関する民族学的調査研究、湯川洋司、2007.
- 5) ふるさと五木村づくり計画、熊本県・五木村役場、2009.

(2010.1.26受付)

## THE "OTAGAISAMA" COMMUNITY: LIVELY INDIVIDUALS IN A LIVELY VILLAGE

Kiyoko YANAGIDA, Nobuko TERAMOTO. Kanryou SARUWATARI and Daizou HAMADA

What is necessary for people living in Itsuki-village to sustain their own life in the place where they were born and raised ?

The answer is that the community should balance "self-help," "mutual assistance," and "public assistance."

As each member in the community does what s/he is good at, individuals will get lively, and, then so does the community. This leads to the community where members can mutually exchange support for each other. That is the status of "Otagaisama" in Japanese, in which community members would say "I will help you when you are in trouble, and I will ask you for help when I am in trouble." We will set the community in "Otagaisama" as a goal for Istuki-village with a theme, "Each villager plays a major role in building a new community where all members can say "Otagaisama" to each other."